

# 2019年度 地域連携活動報告書

連携先名称：長野県長和町

協定締結日：2008/11/25

活動状況：継続中

連携先窓口：長和町役場産業振興課農政係

活動資金：学科の予算と町からの補助金、地方創生事業補助金（本年度で終了）

活動体制：大学

担当教員（所属）：増田敬祐（食料環境経済学科）

関連教員（所属）：大浦裕二（食料環境経済学科）

活動目的：

- 1.長和町の地域活性化のための連携事業
  - ・体験を通じた学生と地域の交流人口拡大による地域活性化
  - ・地域産品を活用した商品開発
- 2.伝統文化継承のための連携事業
  - ・伝統文化継承・発展に向けた都市農村間の相互交流のための仕組みの構築
- 3.人材育成のための連携事業
  - ・地域で活躍する人材育成のための実習

活動内容・成果：

- 1.長和町の地域活性化のための連携事業
  - ・農大学生の実学主義に基づく実習への参加  
実施時期：2019年度内10回、参加人数：（農大教員毎回2～3名、農大生合計287名、地元農業者毎回2～3名、長和町職員毎回4名）
  - ・特産品開発と販売（長和のトマト、エゴマ油など）
  - ・地域活性化に資する「ふるさとCM大賞」への応募と入賞
- 2.伝統文化継承のための連携事業
  - ・伝統文化継承・都市農村間の相互交流（町内の伝統行事、地域運動会への参加など）
- 3.人材育成のための連携事業
  - ・地域の実情を把握し、問題解決に向けたプランニング力を涵養するためのワークショップを毎回の実習で行った。

課題・改善点：

- ・PDCAサイクルにおける check の時間の充実を図る必要がある。

鹿児島県喜界町

ヒトを結び産業興し

長野県長和町

山村再生へプロジェクト

食料環境経済学科助教 増田 敬祐

東京農業大学は、平成20年11月25日に長野県長和町と連携協定を締結した。事の起りは、食料環境経済学科の立岩寿一教授(現在は名誉教授)を中心として始まった4年からの長和町林業後継者グループとの植林交流にある。

20年5月には「地域再生・活性化の担い手育成教育」として文科省の「質の高い大学教育」採択を受けた。現在は山村再生プロジェクトとして年度内に10〜11回、長和町をフィールドに2泊3日の教育プログラムを実施しており、

30年度の連携活動への参加学生は延べ数で100〜8人だった。

山村再生プロジェクトの主な活動内容として①有休廃農地の活用②特産品開発③地域再生・活性化プランニング④地域交流⑤伝統文化・歴史体験⑥自然資源の保護が挙げられる。まず、有休廃農地を利用した特産品開発についてであるが、地元の長和雑穀研究会と連携し、キヌア、アマランサス、エゴマの栽培から加工、販売までの一連の作業に学生も適宜、参加させて

「長和のトマト」という特産品について農大生が「育てるところから売るところまで」をモットーに商品開発に取り組んでいる。圃場(ほしよ)作業はもとより、収穫祭での販売に向け、消費者にどのような特産品の魅力を伝え、また長和町について興味をもってもらえるか、マーケティングの仕方を学生自らで考える。

これらを地域再生プランニングの一環として位置付け



トマトスープ作りを学ぶ農大生



松尾大社例祭で大根踊りを披露する農大生

ち続ける学生をいかにして育てるかという、モノだけでなくヒトの育成も射程に入ってくる。本プロジェクトでは地域交流や伝統文化・歴史体験として松尾神社例祭に参加するなど、地元の方々のさまざまな交流も行っている。これらの交流体験は卒業後も農大生が長和町を訪れるきっかけとなっており、実際、OB・OGは定期的に町を訪れている。本プロジェクトでの連携協定は、モノの開発はもちろん、ヒトを結び、ヒトを育てるアクティブラーニングでもあるところに特徴がある。

連携協定 地域活性化の役割担う

果樹とヤムイモを活用

名誉教授 豊原 秀和 国際農業開発学科教授 杉原たまえ

鹿児島県の喜界島は奄美群島の北東部に位置し、面積56・93平方キロの小さな島である。人口は7500人で、多くは基幹産業であるサトウキビ生産とコマ生産、畜産業が主体である。

喜界島は「美しい村連合」に加盟しており、埋蔵文化財、世界的に有数といわれる隆起サンゴ礁、集落で見られるサンゴの石垣、豊かな自然と農業景観や島特産のコマの乾燥風景などが印象に残る。しかし、いったん集落の中

に入ると荒れ果てた屋敷や無残な姿で残された廃屋が多く目につく。喜界町観光課の資料によると全く出入りのない空き家が129軒、廃屋257軒、合計で386軒もあるという。

基幹産業であるサトウキビが全島を覆い、見事な景観を醸し出し、耕作放棄地はほとんど見当たらないが、今後は担い手不足やサトウキビ農家の高齢化により現状を維持するのは困難な状況である。

私たちが取り組んでいるのが空き屋敷や廃屋を利用した

観光果樹園である。この計画のこだわりは導入果樹による果樹園ではなく、島固有のかんきつ類の収集と復活に重点を置いていることである。喜界島にしか見られない花良治(けりじ)ミカン、島ミカン、フスー、クネンボなど多種類のかんきつが過去には多く見られたが、それらが減少あるいは消滅している。

そこで、空き屋敷を利用して花良治ミカン100本、その他のかんきつを各10本ほど栽培し2年目を迎える。しかし南西諸島は毎年台風の襲来



ヤムイモについての説明会



ヤムイモ



カットヤム



パウダー

産量が期待されたことや、作業が容易で高齢者でも栽培が可能と判断し、30戸ほどの農家を集めて講習会を開催。技術指導を行った。栽培が容易で年配者でも容易に収穫可能な品種を選別し、営業支援センターで収穫したものを配布した。

その結果かなりの生産が見込まれたことから、株式会社全笑に依頼し、商品化を試みた。全笑は、農家から1キロ200円で買い取り、ヤムイモ

鹿児島県は「かるかん饅頭(まんじゅう)」など有名であるが、今後は喜界島産「かるかん饅頭」などの二次製品の開発に向けて菓子メーカーなどの連携を進めている。その他、菊芋、ムクナなど機能性食材などの試作を継続していく予定である。



大地町、太地漁協、太地水産共同組合

東京農大は和歌山県太地町、太地町漁業協同組合、太地水産共同組合と包括連携協定を締結した。協定の活動内容は①まちづくりおよび人づくりに関すること②自然、環境、産業および



南あわじ市、JAあわじ島

東京農大は兵庫県南あわじ市、あわじ島農業協同組合と包括連携協定を締結した。

協定の活動内容は①農林水産業および農村地域の課

新しい連携協定

地域振興に関すること③教育・研究・文化の発展に関すること——が主な柱。

本学と太地町、太地町漁業協同組合、太地水産共同組合とは、海洋水産学部の小林万里教授による海生哺乳類の調査・研究をしてきた。今後はクジラやイルカの生物学的・生態学的な調査・研究だけではなく、利用・加工や販売での協力など地域産業の発展への取り組みも行う。

締結式は5月16日、世田谷キャンパスのアカデミアセンターで行われ、太地町の三軒一高町長、太地漁協の脊古輝人組合長、太地水産共同組合の岸野知夫理事長らと、東京農大から高野克己学長、山本祐司副学長らが出席したII写真⑤。

課題解決②次代を担う人材の育成③学術・研究・広報④産業・科学技術の振興⑤雇用の創出⑥地域の活性化または交流の拡大——が主な柱。

本学と南あわじ市、JAあわじ島とは、ビジネス学科の生徒が、南あわじ市「アグリアイランド」で実習を行ってきた。今後は、三毛作体系の継続を目指した土づくりと生産体制の強化など地域産業の発展に向けた取り組みも行う。

締結式は5月14日、世田谷キャンパスのアカデミアセンターで行われ、南あわじ市の守本憲弘市長、JAあわじ島の森紘一組合長らと、東京農大から高野克己学長、大浦裕二エクステンションセンター長らが出席したII写真⑥。



TOKYO UNIVERSITY OF AGRICULTURE 1891

世田谷キャンパス  
 大学院・応用生物科学部  
 生命科学部・地域環境科学部  
 国際食料情報学部  
 厚木キャンパス  
 大学院・農学部  
 北海道オホーツクキャンパス  
 大学院・生物産業学部

4月・7月・11月

編集 東京農業大学

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘

http://www.nodai

〔総研ニュース〕「最南端」キャンパス「宮古亜熱帯農場」……  
 〔活躍する卒業生〕日本の「桜」風景を守り育てる……  
 世界学生サミット・「持続可能な農業」へ熱い議論……  
 来年度につながる経験値得る——男女駅伝……

# 未来へ豊穰祝う

# 収穫祭

11万人が来場  
3キャンパス計



## 世田谷キャンパス

### 伝統継承し令和、未来へ

令和初となった今年の収穫祭。まず、うれしいニュースは、生物応用(農芸)化学科統一本部のお披露目となった。販売担当の女子学生は「二合分のお米を3品種選べる『食比べセット』が好評です。予想以上の売れ行きです」と反響の良さに驚きの表情。

「長和のトマト」は、山村再生プロジェクトの一環として、ペーパースト状に近いトマトを製品化したもの。毎年、長野県小県郡長和町の農場で栽培・収穫・加工を行うが、今年からはパッケージデザインまで学生たちが手掛けた。指導にあたる先生も「これだけ実践的なプロジェクトは日本の大学でも非常に珍しいこと」と誇らしげだった。

全国的先輩方とも連携した2012年卒業の男性OBは、数年前にキャンパスを訪れた。「収穫祭は、芸能人などと呼ばれる祭。まして他の大学では、蜂蜜や味噌を売ったりもしていないです」と話し、在学時代を懐かしんだ。山梨県から駆けつけた保護者夫婦は「これだけ多くの一般の方が来られるとは」と、盛況ぶりに目を見張った。写真。

不動の人気を博す蜂蜜と味噌の存在だ。「今日午前8時までに770人の方が並びました！」と興奮気味に話すのは、ミツパチ研究会所属の男子学生。今年もスタッフ全員が、蜂の描かれた抽斗の黄色いパーカーで販売に励んだ。醸造科学科統一本部が販売する味噌・醤油・漬物売り場は、

厚木キャンパスの農学部収穫祭は、今年で20回目。「分かち合う農の喜び」をテーマに開催された。通称「大根プロジェクト」と呼ばれる大根の無料収穫体験は、5年目を迎えた今年も人気だった。全学応援団による青山ほどり(大根おどり)がスタートの合図となり、多くの来場者がぎ

「大根プロジェクト」を盛り上げた全学応援団

その他、親子限定サツマイモ掘り体験や「バター作り体験」「牛のブラッシング」など子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。牛と触れ合うことのできる家畜苑では、はじめは恐る恐る牛を触っていた子どもたちが、「もももも」

勢原農場で田植えと収穫を行った多くの品種から7品種を厳選。今年が初のお披露目となった。販売担当の女子学生は「二合分のお米を3品種選べる『食比べセット』が好評です。予想以上の売れ行きです」と反響の良さに驚きの表情。

「長和のトマト」は、山村再生プロジェクトの一環として、ペーパースト状に近いトマトを製品化したもの。毎年、長野県小県郡長和町の農場で栽培・収穫・加工を行うが、今年からはパッケージデザインまで学生たちが手掛けた。指導にあたる先生も「これだけ実践的なプロジェクトは日本の大学でも非常に珍しいこと」と誇らしげだった。

今年が初めての来場。緑も多くて、子どもと一緒に楽しめそう。来年も来てみたいと話した。文化学術展やサークル発表の会場でも、多くの親子連れの姿があった。幅広い世代に親しまれているこの他、東北から沖縄までの先輩の家から、各産地に伝わる独自の味わいを約50種類も取り揃えた。全国各地にしっかりと根を張る先輩方との連携も伝統の証しだ。

ペーパーを押しなが訪れた若い夫婦は、き継がれていくだろう。令和の時代を生きる現在の学生たちへ、そして未来の農大生へも脈々と引き継がれていくだろう。

厚木キャンパスの農学部収穫祭は、今年で20回目。「分かち合う農の喜び」をテーマに開催された。通称「大根プロジェクト」と呼ばれる大根の無料収穫体験は、5年目を迎えた今年も人気だった。全学応援団による青山ほどり(大根おどり)がスタートの合図となり、多くの来場者がぎ

「大根プロジェクト」を盛り上げた全学応援団

その他、親子限定サツマイモ掘り体験や「バター作り体験」「牛のブラッシング」など子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。牛と触れ合うことのできる家畜苑では、はじめは恐る恐る牛を触っていた子どもたちが、「もももも」



令和初となった今年の収穫祭。まず、うれしいニュースは、生物応用(農芸)化学科統一本部のお披露目となった。販売担当の女子学生は「二合分のお米を3品種選べる『食比べセット』が好評です。予想以上の売れ行きです」と反響の良さに驚きの表情。

「長和のトマト」は、山村再生プロジェクトの一環として、ペーパースト状に近いトマトを製品化したもの。毎年、長野県小県郡長和町の農場で栽培・収穫・加工を行うが、今年からはパッケージデザインまで学生たちが手掛けた。指導にあたる先生も「これだけ実践的なプロジェクトは日本の大学でも非常に珍しいこと」と誇らしげだった。

今年が初めての来場。緑も多くて、子どもと一緒に楽しめそう。来年も来てみたいと話した。文化学術展やサークル発表の会場でも、多くの親子連れの姿があった。幅広い世代に親しまれているこの他、東北から沖縄までの先輩の家から、各産地に伝わる独自の味わいを約50種類も取り揃えた。全国各地にしっかりと根を張る先輩方との連携も伝統の証しだ。

ペーパーを押しなが訪れた若い夫婦は、き継がれていくだろう。令和の時代を生きる現在の学生たちへ、そして未来の農大生へも脈々と引き継がれていくだろう。

厚木キャンパスの農学部収穫祭は、今年で20回目。「分かち合う農の喜び」をテーマに開催された。通称「大根プロジェクト」と呼ばれる大根の無料収穫体験は、5年目を迎えた今年も人気だった。全学応援団による青山ほどり(大根おどり)がスタートの合図となり、多くの来場者がぎ

「大根プロジェクト」を盛り上げた全学応援団

その他、親子限定サツマイモ掘り体験や「バター作り体験」「牛のブラッシング」など子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。牛と触れ合うことのできる家畜苑では、はじめは恐る恐る牛を触っていた子どもたちが、「もももも」



3、4面にも関連記事

数ある模擬店の中でも目を引いたのが、食農広報部のブランド米だ。伊

生も「これだけ実践的なプロジェクトは日本の大

学でも非常に珍しいこと」と誇らしげ

った。

今年からはパッケージデザインまで学生たちが手

掛けた。指導にあたる先生も「これだけ実践的な

プロジェクトは日本の大学でも非常に珍しいこと

と誇らしげだった。

不動の人気を博す蜂蜜と味噌の存在だ。「今日

午前8時までに770人の方が並びました！」と

興奮気味に話すのは、ミツパチ研究会所属の男子

学生。今年もスタッフ全員が、蜂の描かれた抽

斗の黄色いパーカーで販売に励んだ。醸造科学科

統一本部が販売する味噌・醤油・漬物売り場は、

味噌・漬物売り場は、

今年が初めての来場。緑も多くて、子どもと一緒に

楽しめそう。来年も来てみたいと話した。文化学術

展やサークル発表の会場でも、多くの親子連れの

姿があった。幅広い世代に親しまれているこの他、

東北から沖縄までの先輩の家から、各産地に伝わる

独自の味わいを約50種類も取り揃えた。全国各地

にしっかりと根を張る先輩方との連携も伝統の証し

だ。ペーパーを押しなが訪れた若い夫婦は、き継が

れていくだろう。令和の時代を生きる現在の学生

たちへ、そして未来の農大生へも脈々と引き継が

れていくだろう。

厚木キャンパスの農学部収穫祭は、今年で20回目

。「分かち合う農の喜び」をテーマに開催された。

通称「大根プロジェクト」と呼ばれる大根の無料

収穫体験は、5年目を迎えた今年も人気だった。全

学応援団による青山ほどり(大根おどり)がスタート

の合図となり、多くの来場者がぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

ぎ

# 賞状

abn・八十二  
「第十九回ふるさとCM大賞 NAGANO」  
敢闘賞

長和町 殿

あなたが abn・八十二「第十九回ふるさとCM大賞 NAGANO」に出展された作品は、企画・構成・映像などすべてにわたって極めて優れており、厳正な審査の結果、頭書の賞に選ばれました。その栄誉と関係者のご努力を讃え、ここに賞します。

令和元年十二月一日

長野朝日放送株式会社

代表取締役社長 土屋 英樹

「ふるさと」への思いを「手作りCM」にこめた映像の傑作  
abn・八十二  
ふるさとCM大賞  
NAGANO



【長和町】遠い所から黒耀（ご苦労）さん

【長和町】遠い所から黒耀（ご苦労）さん



制作

東京農業大学 山村再生プロジェクト

みどころ

「黒耀の水」は地元はもちろん、遠くの町の方にも親しまれています。車のナンバープレートで遠方から来ているという表現を試みました。「横浜？ 那覇？ 本当にそんな遠くから水汲みに来る人いるの？」と思われる方がいると思います。しかし撮影中、実際に鹿児島ナンバーの車で水汲みに来られた一般の方いて「本当に遠くから水を汲みに来る人があるんだな～」と身を持って体感しました。是非『黒耀の水』をご賞味あれ。